

助動詞「む」の連体用法について

高山 善行

キーワード：「む」、モダリティ、名詞句

要 旨

助動詞「む」は連体用法で《仮定》《婉曲》を表すと言われているが、実際にはよくわかっていない点が多い。本稿では、このテーマをモダリティ論の視点から捉え直し、新しい分析方法を提案する。まず、Aタイプ（「～ ϕ 人」）、Bタイプ（「～む人」）という名詞句の対立を設定し、それらの用例を平安中期文学作品から抽出する。そして、述語の性質、時間・場所表現との共起、「人」の数量の観点から、両名詞句の性質を比較してみた。その結果、Aタイプには制約が見られないが、Bタイプにはいくつかの点で制約が認められた。Bタイプでは「人」が非現実世界（想像の世界）に位置づけられているのである。この事実をもとに、本稿では、連体用法「む」は非現実性を標示する機能（「非現実標示」）をもち、名詞句の標識として働いていると結論づける。

はじめに

助動詞「む」は連体用法で《仮定》《婉曲》を表すと言われ、古典文法では、「仮定婉曲用法」の名で知られている。しかし実際には、この用法での「む」の性質はよくわかっていない点が多い。本稿では、この問題をモダリティ論の視点から捉え直す。そして、連体用法での「む」の機能を明らかにすることを目標とする。

1. 準備

1.1 研究のながれ

助動詞「む」の連体用法とは、以下のようなものである。

- (1) a. いみじからむ心地もせず、悲しくのみある。(竹取物語)
- b. 思はむ子を法師になしたらむこそ心ぐるしけれ。(枕草子)
- c. さびしくあばれたらむ葎の門に、(源氏物語・帚木)

この用法については、江戸期に富士谷成章が指摘している。近代以降の研究では、佐伯梅友（1936）の記述がある。筆者の見る限り、「む」が《仮定》《婉曲》を表すという

理解の最も早いものである。

(2) 「又ある事柄を假定していつたり、或は言ひ方をやはらげていふに用ひる場合もある。——略——但しこの用法は連體形に限るやうである」

(佐伯梅友 (1936) 『国語史 上古篇』 p. 169, 下線筆者)

《假定》^{注2}《婉曲 (やわらげ)》という理解は、そのまま現在に受け継がれている。たとえば、(3)は最近の文法辞典の記述である。

(3) 「婉曲・假定。事実としてそのままに言ってよいところを、不確かなこと、仮定的なこととして表現するのに用いる。…」(『日本語文法大辞典』より、下線筆者)
現在、連体用法「む」が《假定》《婉曲》を表すのは古典文法の常識であるように見える。しかしながら、この用法については不明な点が多い。

まず、《假定》については、《推量》との違いが明らかでない。接続法による假定表現との関係もはっきりしない。《婉曲》については、本当に「やわらげ」ているかどうか疑わしいし、「やわらげ」なければならない必然性も明らかでない。このような疑問が生じてくるのは、《假定》《婉曲》が直感的理解にとどまり、具体的な言語事実に即した記述分析がなされていないことに起因する。

1.2 研究の目的

本稿で取り上げるテーマは助動詞「む」の用法のひとつであり、助動詞論で扱われるのが通常である。以下では、それをモダリティ論、モダリティ表現史の問題として捉え直してみたい。

さて、現代語では、モダリティ形式が連体節中に生起しにくいという事実がある。^{注3}

(4) 現代語

- a. ? (将来) 起こるだろう事件
- b. *面白いそうな映画
- c. *潰れるにちがいない大学

一方、古代語では、(5)のようにモダリティ形式がかなり自由に生起できる。

(5) 古代語

- a. 明けむあした (万葉集)
- b. 男もすなる日記 (土佐日記)
- c. 関吹き越ゆると言ひけむ浦波 (源氏物語・須磨)

以上は、現代語と古代語のモダリティ形式の違いを反映するものと思われる。では、それは一体どのような違いなのであろうか。古代語で盛んだった連体用法は、なぜ衰退してしまったのであろうか。

このような問題は、現代語だけ、古代語だけを扱う立場では気づきにくい^{注4}が、史的対照の観点に立つと顕在化してくるものである。それは、モダリティ表現史を明らかにす

る上での重要な課題の一つと言える。この課題をただちに解決することはできないが、本稿では助動詞「む」に焦点を当てて、研究の出発点にしようと思う。「む」は古代語モダリティ形式の代表的な存在であるし、連体用法で用いられた用例の割合が多い。^{注5}「む」の記述分析が進めば、モダリティ形式の連体用法を解明する糸口がつかめるはずである。

1.3 従来の方法の問題点

これまで、連体用法「む」を正面から取り上げた研究はほとんど見られず、助動詞研究の中で最も扱いにくいテーマの一つと言える。^{注6}その背景には、伝統的な助動詞研究が抱える方法論上の問題があると思われる。

一般に助動詞研究では、大量の用例を収集して用例の意味解釈を積み重ね、それらを分類するという方法がとられる。それは帰納重視、意味重視の立場と言える。この方法が研究の基礎的段階で一定の成果を挙げた点は認めておかねばならない。

しかしながら、本稿のテーマに関しては、一般的な方法は通用しにくいと思われる。連体用法「む」は現代語に置き換えにくいいため、われわれ現代人にとっては「む」の意味解釈がきわめて困難である。大量の用例を帰納したとしても、その問題が解消するわけではない。「む」の使用条件、使用文脈といった周辺的な情報は蓄積されるだろうが、「む」の性質を直接的に捉えることはできない。

さらに、意味研究の方法についても疑問がある。従来の助動詞研究では、文末用法の意味を連体用法に当てはめるという方法が見られる。この方法によれば、「む」の基本的意味を《推量》とし、連体用法では《推量》が変容（もしくは希薄化）すると捉えることになる。《仮定的推量》という折衷的な名付けの意味記述はその顕れであろう。

だが、野村（1995）、尾上（2001）が指摘するように、「む」の基本的意味を《推量》と見ることに問題がある。また、多義的なモダリティ形式の文末用法での意味を安易に文中用法へとスライドさせるべきではない。「む」については、文中用法と文末用法を別個に精査した上で、両者を総合するという手順をふむ必要がある。^{注7}

以上のように考えると、連体用法「む」の分析にあたり、伝統的な助動詞研究の方法には限界があることを認めざるを得ないのである。^{注8}

2. 方法

先述のように、連体用法「む」を分析する際には従来の方法は有効でなく、新しい分析方法を工夫する必要がある。本稿では、以下の方法で分析を行うことにする。

2.1 名詞句の対立

中古の和文文学作品では、「人」を主名詞とする名詞句がしばしば用いられている。^{注9}

そこで、下記のような名詞句の対立（一種のミニマルペア）を設定してみよう。

A タイプ [活用語+人]	(例:「若き人」)
B タイプ [活用語+む+人]	(例:「若からむ人」)

A タイプ名詞句は活用語に直接「人」（複数形、豊語形を含む）が後接する。一方、B タイプ名詞句は活用語が「む」を介して「人」に結びついている。つまり、「む」の有無が両タイプの違いである。以下では、この A タイプ名詞句、B タイプ名詞句（以下、単に A タイプ、B タイプと呼ぶ）の違いを比較することによって、連体用法「む」の性質を捉えてみたい。従来の帰納的方法に対して、本稿では演繹的方法を用いる。

A タイプ、B タイプの実例を挙げておこう。

(6) A タイプ

- a. 近き隣に心ばへ知れる人、出づるに合はせてかくいへり。(蜻 25)
- b. いときよげなる人をすてて、にくげなる人を持たるも、あやしかし。(枕 280)
- c. 乗り並ぶ人けしうはあらじはや、(源 2-24)

(7) B タイプ

- a. そのいはむ人を知るはなぞと思ひけむかし。(蜻 237)
- b. 思はん人の、「なほ」など心ざしありて言はむを、(枕 237)
- c. 「心やすからむ人は、なかなかむらうたかるべきを」(源 1-350)

なお、「～人」名詞句は文法研究では注目されていないが、文体研究、文学研究で取り上げられている。本研究はそれらの研究と深いところで繋がるのであるが、この段階では立ち入らず指摘にとどめる。

2.2 「む」と ϕ

本稿では、「む」使用例と「む」の非使用例（unmarked の形、 ϕ で表す）との対立を重視する。これまでの研究では、もっぱら「む」の用例を研究対象とし、非使用例に対して十分に注意を払ってこなかったようである。

たとえば、「む」は《一般論》を表すと言われることがある。しかし実際には、「む」非使用の A タイプも《一般論》で用いられている。

(8) 「十にあまりぬる人は、雛遊びは忌みはべるものを、……」(源 1-393)

(8) は、乳母（＝少納言）が幼い紫の上に説教する場面である。ここでは、「十歳を越えた人は、人形遊びを卒業するものだ」という《一般論》が述べられている。《一般論》は「む」の意味ではなく、むしろ「む」使用の文脈条件と見るべきであろう。

また、「む」は《未来》を表すとも言われている。(9) を御覧いただきたい。

(9) けふこの山つくる人には日三日たぶべし。(枕 104)

「雪山を作る」行為は、この文の発話時点以降の未来の事態である。そこで、「この山

つくらむ人」が期待されるところだが、実際には ϕ になっている。

結局、『一般論』『未来』は、「む」の一面を捉えてはいるが、本質的な性質とは言い難い。「む」使用例だけを見ていると、(8)(9)のような例は最初から研究対象になりにくいのである。「む」と ϕ の対立・相対化は、「む」固有の意味、機能を捉える上で重要な視点である。

2.3 用例調査

さて、実際に A タイプ、B タイプの用例を抽出することになるが、今回は、『蜻蛉日記』（新潮古典集成、新潮社）、『枕草子』（新日本古典文学大系、岩波書店）、『源氏物語』（日本古典文学全集、小学館）を資料として用いた。挙例は注釈書の本文によるが、表記を一部改めた部分がある。なお、用例末尾に作品名の略称と注釈書の頁数を記した。以下では、これら三作品の用例を観察分析の対象とし、平安中期の実態を見ていこうと思う。

用例調査の結果、作品別用例数は表 1 のようになる。なお、『源氏物語』の A タイプだけは、桐壺巻～明石巻の範囲での用例数である。次節では、表 1 の用例を対象として観察、分析を行う。

表 1

	蜻蛉日記	枕草子	源氏物語	計
A タイプ	247	238	263	748
B タイプ	5	21	101	127

3. 観察

本節では、A タイプと B タイプの比較検討を行なう。比較の観点は、名詞句と対応する述語の性質、時間表現・場所表現との共起、主名詞「人」の数量の三点である。

3.1 述語の性質

まず、A タイプ、B タイプと対応する述語の性質について見ていこう。以下では、(ア)品詞的タイプ、(イ)文法的特徴、について調べてみた。

(ア) 品詞的タイプ

ここでの品詞的タイプは具体的には、動詞述語、形容詞述語（形容動詞述語、名詞述語を含む広義形容詞述語）、存在詞述語（敬語系を含む。コプラの用法は除く）である。実際に用例を観察してみると、A タイプ、B タイプともに、動詞述語、形容詞述語が生起している。

(10) 動詞述語

6

- a. あくる日、幼き人、殿へと出で立つ。(蜻 116)
- b. なでうことなき人の、笑がちにてもものいたう言ひたる。(枕 33)
- c. 「綾などならばこそ、裏を見ざらん人もげにと直さめ」(枕 123)
- d. まことに心ばせあらむ人は、わが方にぞ寄るべきや。(源 6-259)

(11) 形容詞述語

- a. なほ、いねぬ人は心にくし。(枕 241)
- b. 出で立ち参る人もなし。(源 2-214)
- c. 「なほ、顔いとにくげならん人は、心うし」(枕 66)
- d. すこしもの思ひ知らむ人は、涙惜しむまじくあはれなり。(源 2-368)

一方、存在詞述語は A タイプだけに見られ、B タイプは用例がない。

(12) 存在詞述語

- a. さかしらがる人のありて、ものいひつく人あり。(蜻 265)
- b. いとむつかしう、うちきく人だにあり。(枕 217)
- c. ゐざり出づる人あなり。(源 1-290)

結局、A タイプ、B タイプに対応する述語の品詞的タイプに関しては、動詞述語、形容詞述語は共通するが、存在詞述語の生起に関しては違いが見られる。

(イ) 文法的特徴

次に、文法的特徴について観察する。テンス・アスペクト形式、モダリティ形式の生起について見ていく。実際には、A タイプの述語はテンス・アスペクト形式が生起するが、B タイプの場合は生起していない。

(13) テンス・アスペクト

- a. わが頼もしき人、陸奥へ出で立ちぬ。(蜻 16)
- b. はじめつかたは、かちありきする人はなかりき。(枕 42)
- c. 幼き人を盗み出でたりと、… (源 1-326)

一方、モダリティ形式は両タイプともに生起している。

(14) モダリティ

- a. ものなど思ふ人もあらじかしと、… (蜻 115)
- b. げによからぬ人の言ひおきけむ。(源 2-189)
- c. 最終の車に乗りて侍らん人は、いかでかとはまゐり侍らん。(枕 297)
- d. あらぬ世に生まれたらん人はかかる心地やすらん、… (源 6-298)

(ア)(イ)を合わせて、述語の性質についてまとめると、A タイプの述語はすべて用例が見られるが、B タイプでは、存在詞述語、テンス・アスペクト形式が生起しないという事実が確認できた。

3.2 時間表現、場所表現との共起

次に、時間表現、場所表現との共起について観察する。

まず、時間表現について見ていく。Aタイプは時間表現と共起する例が55例あるが、Bタイプは(15c)のみである。

(15) 時間表現

- a. 昼つかた, 出でつる人, 帰り来たり。(蜻 148)
- b. 「細殿に, びんなき人なん, 暁に傘さして出でける」(枕 261)
- c. 暁にかへらん人は、装束などいみじううるはしう、…。(枕 74)

(15b)(15c)は、どちらも「暁に」が使われている。しかし、(15b)は、「びんなき人」が傘をさして出て行った「暁」であり、特定の〈時〉を表しているが、(15c)では、作者が一般論として述べているのであり、不特定の〈時〉を表す。

では、場所表現との共起についてはどうであろうか。Aタイプは場所表現と共起する例が74例あるが、Bタイプは(16c)のみである。

(16) 場所表現

- a. 南面に, このごろ来る人あり。(蜻 132)
- b. まへなる人に教へても言はせたる。(枕 202)
- c. などか、家に入りゐたらん人をば、知らせでもおはせかし。(枕 265)

Aタイプと共起する場所表現は特定の〈場所〉を表しており、(16b)「まへ(「前」)」のようなダイクシス要素も目立つ。一方、(16c)の「家」は特定の家ではない。(16c)は、説話に作者の感想が挿入された部分であり、やはり一般論として述べられているのである。

以上、時間表現、場所表現との共起について見てきた。Aタイプは時間表現、場所表現と親和性があるが、Bタイプはどちらとも相容れにくい。ただし、不特定の〈時〉〈場所〉を表す場合には共起可能である。

3.3 「人」の数量

主名詞「人」の数量について観察する。「人」の数量に関する表現は多様である。以下では、複数、枚挙、多数少数、数量詞遊離(数量詞連結)の場合に分けて、順に見ていくことにする。

まず、「人」の複数について見よう。Aタイプでは、「人」の複数形(「～人ども」「～人たち」など)が見られるが、Bタイプにはない。

(17) 複数

- a. 源少納言, 中納言の君などいふ人たち(枕 123)
- b. そのかたはらなる人ども(枕 117)
- c. (作例) *若からん人たち, *若からん人ども

次に、枚挙について見ていく。「人」の疊語形「人々」は、複数を表すだけでなく、^{注11}「あの人この人」のような《枚挙》を表すとされる。実際には、Aタイプでは「人々」が94例あるが、Bタイプは(18c)だけである。^{注12}

(18) 枚挙

- a. これかれある人々呼び寄せつつ、… (蜻 61)
- b. わかき人々二十人ばかり、そなたに行きて、(枕 204)
- c. (薫)「とまりたまはん人々を思しやりて、…」(源 5-444)

(18c)は、薫が故八の宮の胸中を推し量る場面である。存命中の八の宮の思いを追体験している。「とまりたまはん人々」は、《将来(宇治に)とどまり続ける大君・中君》の意である。

次に、「人」の多数少数を表す例を見よう。これもAタイプは用例が20例あるが、Bタイプは(19c)のみである。

(19) 多数少数

- a. 泣くが上にまた泣き惑ふ人多かり。(蜻 51)
- b. 見ぬ人はすくなくこそあらめ、(枕 27)
- c. (源氏)「見む人のあまたが中にかかづらはむ末にては、…」(源 3-226)

(19c)は、光源氏が玉鬘の扱いについて思案する場面である。ここでの「見む人」は、《(源氏)が将来世話をする女性たち》を指す。源氏は、玉鬘がそれらの女性たちの末席に位置することを心配しているのである。先の(18c)と同様、これも未来の事態を想像するものである。

最後に、数量詞遊離(数量詞連結)について見ておく。数量詞遊離は、やはりAタイプだけに見られる。

(20) 数量詞遊離

- a. おなじ心なる人(=気の合った人) 二三人ばかり、… (枕 220)
- b. 思ふ人(=愛人) 二人もちて、… (枕 198)
- c. 若き人二三人あるは、… (源 1-355)
- d. (作例) *若からん人 二三人, *思はむ人 二人

以上、Aタイプには「人」の数量を表す例が多く、かつ数量を多様な形で表すことができた。それに対して、Bタイプは「人」の数量を表す例がきわめて少なく、数量性とは相容れにくいと言える。^{注13}

3.4 本節のまとめ

本節で観察してきた事実を表2でまとめておく。

表2の特徴について簡単に述べておこう。Aタイプ名詞句は、述語の性質、時間・場所表現との共起、人の数量のすべてに関して用例が見られる。一方、Bタイプは、存

表2 まとめ

	述語の性質					時間・場所 表現との 共起		「人」の数量			
	(ア) 品詞的タイプ			(イ) 文法的特徴							
	動詞	形容 詞	存在 詞	テンス・ アスペクト	モダリティ	時間	場所	複数	枚挙	多数 少数	数量詞 遊離
Aタイプ	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
Bタイプ	+	+	－	－	+	(－)	(－)	－	(－)	(－)	－

在詞述語が生起せず、時間・場所表現との共起、「人」の数量についても用例がほとんどない。^{注14}表中、(—)で示した少数の例外が存在するが、それらについては後で検討を加えることにする。

4. 分析

本節では、3.で観察した事実をもとに、「む」を含んでいる B タイプ名詞句に焦点を当てて、その意味的特徴について検討する。

4.1 B タイプの非現実性

先述のように、B タイプにはいくつかの点で制約が見られる。それらの制約をもとに、B タイプの「人」が意味論上、どのような性質を持つか考えてみよう。

まず、B タイプには、時間・場所表現との共起、テンス形式の生起に制約がある。そのため、時空の座標軸上に「人」を位置づけることができない。また、存在詞、アスペクト形式の生起、人の数量にも制約が見られた。そのため、現実世界に実在する「人」の〈存在〉〈動きの様態〉〈数量〉について描写することができない。なお、ここでの「現実世界」とは、「作者が作品中において現実のものとして表現する世界」のことであり、いわゆる「史実」とは異なる。

さて、現実世界の「人」は、時空の座標軸上に位置づけることができ、〈存在〉〈動きの様態〉〈数量〉について自由に描写することができるはずである。だとすると、B タイプの「人」は、現実世界に実在し、描写可能な「人」ではありえない。つまり、それは、作者もしくは登場人物の頭の中にある「人」なのであり、非現実世界（想像の世界）の「人」ということになる。

4.2 関連する事実

B タイプ名詞句と非現実性との結びつきの強さを裏付ける事実を若干追加しておこう。A タイプには次のような例がある。

- (21) a. [ダイクシス要素]「これ食はぬ人は思ふこと成らざるは、…」(蜻 231)

- b. [共同動作] もろともにゐたる人は, こなたにむきたれば, 顔も見えず。
(枕 68)

- c. [様態描写] いとをかしげなる人の, いたう弱りそこなはれて, あるかな
きかの気色にて臥したまへるさま, (源 2-38)

(21 a)は, 「これ」の現場指示によって氷を直示する。(21 b)「もろともにゐたる」は, 女房 (=式部のおもと) が作者自身と一緒に座していることを表す。(21 c)は, 病でやつれた葵の上の様態を詳しく描写している。いずれも現場性, 現実性が顕著な例である。このような例は A タイプだけに見られ, B タイプには一例も見られない。

4.3 例外の説明

以下では, 前節で見られた例外を取り上げ, 説明を試みる。

3.2 では, B タイプには, 時間表現, 場所表現と共起する例が一例ずつ見られた。先述のように, B タイプの「人」が非現実世界に位置するとすれば, その「人」を現実世界の (特定の) 時空に位置づけてしまうと, 表現上矛盾が生じる。よって, 時間・場所表現との共起は, 不特定の〈時〉〈場所〉に限られることになる。また, B タイプで「人」の数量を表す例は, それぞれ, 未来における大君中君, 玉鬘のありように関するものであった。どちらも非現実世界の事態であることは明らかである。

以上のように, B タイプに非現実性を認めることによって, 例外を統一的に説明することができるのである。

付言すれば, 主名詞の数量に関わる「む」は, 想像上のモノ (人も含む) については許容される場合がある。(22)は, 頭に思い浮かぶ古歌 (=古き事) を書くよう中宮定子が試問する場面である。

- (22) 「これにただいまおぼえん古き事,書け」(枕 23)

数量性に関する制約の強弱は, 主名詞の種類によって差が出ると思われる。

5. 結論

ここまでの観察, 分析をふまえて, 連体用法「む」の機能について考えてみよう。

A タイプと B タイプの違いは「む」の有無のみであった。A タイプは無標の名詞句であり, 現実性—非現実性の意味解釈は基本的には文脈によって決定される。一方, B タイプは「む」でマークされることによって, 現実性の解釈は排除され, 必ず非現実性解釈となる。^{注15}「む」が名詞句の非現実性を標示する機能を非現実標示と呼ぶことにしよう。「む」は名詞句の非現実性を明示する標識 (marker) として働いている。なお, 見通しとして述べれば, 連体用法「む」にはモーダルな意味 (判断的意味) は認めにくく, 脱モーダル化した用法と見ることができる。それは商品に貼られたラベルのような存在である。^{注16}

最後に、本稿の理解と現行の記述との関係について述べておく。まず、《仮定》は上記の非現実性を直感的に捉えたものと言える。^{注17}一方、《婉曲》という理解では、Bタイプの諸制約を説明することができない。《婉曲》については、定義の問題も含めて再検討する必要があるだろう。

6. 課題と展望

今回は、連体用法「む」の性質をできる限り客観的に捉えることを目標にし、統語面に重点をおいて記述分析を行なった。一方、意味については課題が残されている。たとえば、Aタイプ、Bタイプで表される《未来》《一般論》の違いをどう捉えるかという問題がある。^{注18}本稿では一般的理解に従ったが、精緻な意味記述を行なう上では、《未来》《一般論》の内実を掘り下げ、体系的な意味理論を構築する必要があるだろう。その点については本稿の範囲では論じきれず、今後の課題としたい。

なお、研究の現状では、「む」以外のモダリティ形式においても連体用法に関しては、直感的理解にとどまっていると言える。「らし」「まし」などが連体用法をもたない（もしくはもちにくい）事実をどう説明するかという問題もある。助動詞個別論の範囲での観察、分析には限界がある（1.3参照）。今後はモダリティ論の枠組みの中で、形式相互の共通性、差異を捉えた体系的記述を目指すべきであろう。こうした見通しのもとで、本研究では他形式の記述分析においても有効性をもつ視点の提示を試みた。^{注19}

おわりに

本稿では、助動詞「む」の連体用法をモダリティ論の問題として捉え直してみた。古代語のモダリティ形式全般について、文中用法の記述を積み重ねていくことは、今後の文法史研究の課題であろう。今回は限定した条件のもとでの記述分析であり、調査範囲の拡大、「む」使用の文脈条件などの点から検証が必要である。^{注20}

注1 「たとへば「帰らむ人に」「逢はむ日までに」など言ふべき言葉を、里には「帰ル人ニ」「逢フ日マデニ」とも言ふたぐひなり。みな今の人言葉に詳しからぬがゆゑなり。」（中田祝夫・竹岡正夫『あゆひ抄新注』）

注2 解釈文法の立場では、以下のような記述もある。

「「む」は非現実のことがらを予想し、想像して表現するのであるから、一般の肯定判断よりは、柔らかな表現になるのは当然である。」（遠藤嘉基・松井利男『古典解釈文法』，下線筆者）

注3 現代語研究では、寺村（1977）、奥津（1974）、三原（1995）などを参照。

注4 「史的対照」は、気づきにくい事実を掘り起こす上で有効な方法である。モダリティの史的対照については、近藤（2000）、高山（2002）参照。

注5 高山（2001）参照。

- 注6 連体用法「む」を正面から取り上げた、数少ない研究としては、小松（1992）がある。
- 注7 たとえば、「む」を文中用法と文末用法に分けて論じた、吉田（1995）が参考になる。
- 注8 井島（2002）では、従来の「古典語過去助動詞」に関する意味研究の問題点、限界について述べている。その指摘は、「む」などモダリティ形式（「推量の助動詞」）についてもあてはまると思う。助動詞研究では、意味重視から機能重視へと転換していく必要があるのではないか。
- 注9 高山（2001）の調査によると、『枕草子』においては、連体用法「む」の主名詞では「人」が圧倒的に多い。「む」に後接する名詞としては、「こと」などの形式名詞もかなりあるが、それらについては準体用法の問題として、連体用法とは分けて議論すべきであろう。
- 注10 「～人」名詞句は、文章史の観点から渡辺（1981）が取り上げており、参考になる。文学研究では、倉田実氏に一連の論考がある。
- 注11 玉村（1986）、蜂矢（1998）参照。なお、国語学で用いられてきた《枚挙》という概念は、定延（2000）の「スキヤニング」概念と重なる可能性がある（定延氏との個人談話による）。
- 注12 『源氏物語』全体で「人々」は698例あるが、「～む人々」は、わずかに（18c）の一例しかない。なお、「このとまりたまはん人」（＝中君5-317）、「とまらん人」（＝中君5-378）のように特定人物を指示する際に「～む人」が使われ、固定化が見られる。
- 注13 複数、枚挙など、名詞の〈数〉概念については仁田（1997）参照。名詞〈数〉概念の文法現象への「跳ね返り」は、古典語研究においても課題となる。
- 注14 Bタイプの特徴には、英語の「定性制限（定性効果）」に類似するところがある。それが表面的な類似にすぎないのか、本質的な共通性があるのかは、今のところわかっていない。
- 注15 「Aタイプ＝現実性」⇔「Bタイプ＝非現実性」、という単純な対立でないことに注意。Aタイプは用例数の多さが示すように汎用性があるが、その一方で現実性、非現実性の意味解釈に曖昧性を有している。
- 注16 先行研究では、連体用法「む」の性質を発話主体の心理作用として捉えるのが一般的である。たとえば、小松（1992）では、連体用法「む」の性質について〈事物や事象を、話し手（書き手）の心の中に《事実の映像》で描き出して表現し、さらに、それを後続体言に結合していく〉と結論づける。本稿では、「む」を発話主体の心的作用、判断のあり方（《推量》《設想》など）の次元ではなく、「名詞句においてどう働くか」という機能面を重視する。
- 筆者は、モダリティ形式の性質を話し手の心的作用の次元で捉えようとする方法そのものを否定するつもりはない。しかしながら、名詞句の意味解釈（聞き手、読み手がどのように意味解釈を行なうか）において、「む」がどのような機能を果たすかという見方も必要ではないかと考える。
- たとえば、「若き人」のような無標の名詞句（本稿のAタイプ）は、汎用性は高いが、意味解釈に関しては文脈依存度が高く、文章においては読み手の負担がかなりあったと思われる。[現実性－非現実性]の識別については、「む」でマークすることによって、負担を緩和することができる。これは、名詞句の側から見れば、モダリティ形式を便利に利用していることになる。

現代語の素朴な感覚に照らすと、句単位で非現実性を標示するのは非効率的に感じられるが、当時はその表現システムに合理性があったはずであり、古代語独自のものとして捉えていくべきである。それは、名詞句とモダリティとの関係論として扱うべきテーマであるが、狭義文法論の範囲を越えて、より大きな理論的枠組みを準備しなければならないだろう。

注 17 仮定条件節帰結部に生起する助動詞群と B タイプ名詞句の述語の助動詞群には平行性が見られ、両者を関係づけることができる。中古においては、「名詞＋なら」型の仮定表現が未発達であったという事実も視野に入れる必要がある。

注 18 2.2 では、《未来》《一般論》が ϕ でも表現可能である旨を述べた。ただし、本稿では《未来》《一般論》の意味が A タイプと B タイプとで全く同質であるということは主張していない。もとより既製の概念での記述には限界がある。たとえば、《未来》については、現実性の強い《未来》と、非現実性の強い《未来》に分けて考えるべきかもしれない。《一般論》についてはその内実を今一度問い直してみる必要があろう。こうした検討も含めて、現実性－非現実性と《未来》《一般論》との関係については、今後理論的に詰めていきたいと思う。

注 19 たとえば、モダリティ形式の使用例を見るだけでなく、「 ϕ との対立」の中で捉える視点は、他形式の分析においても重要となろう。また、「脱モーダル化」という見方によって、「めり」などモダリティ形式が表す《婉曲》を問い直す契機となりうる。筆者は、ある種のモダリティ形式は、典型的な用法（モーダルな用法）とそこからずれた用法（脱モーダルな用法）をもち、両者は連続的であると考えている。

注 20 文脈条件に関して、注意すべき事実を一つ指摘しておきたい。『枕草子』類聚章段では、B タイプがほとんど使われていない。特定の人物を描かず、「イメージを一般化した文章」（渡辺 1981）では、そもそも「む」による非現実標示は必要なかったのであろう。現実描写と作者・登場人物の想像とが交錯する文章においてこそ、連体用法「む」が有効性を持ち得たのではなかろうか。

引用文献

- 佐伯梅友 (1936) 『国語史 上古篇』 (刀江書院)
- 中田祝夫・竹岡正夫 (1960) 『あゆひ抄新注』 (風間書房)
- 奥津敬一郎 (1974) 『生成日本文法論』 (大修館書店)
- Milsark (1974) Existential Sentences in English, Doctorial dissertation, MIT.
- 寺村秀夫 (1977) 「連体修飾のシンタクスと意味——その 2——」 (『日本語・日本文化』 5)
- 渡辺実 (1981) 『平安朝文章史』 (東京大学出版会)
- 遠藤嘉基・松井利男 (1985) 『古典解釈文法』 (和泉選書)
- 玉村文郎 (1986) 「古代における和語名詞の疊語について」 (宮地裕編『論集日本語研究(二) 歴史編』 明治書院)
- 小松光三 (1992) 「体言に連なる助動詞『む』の表現——『枕草子』の場合——」 (『国語と国文学』 69-11)
- 三原健一 (1995) 「概言のムード表現と連体修飾節」 (仁田義雄編『複文の研究 (下)』 くろしお出版)

- 野村剛史 (1995) 「ズ, ム, マシについて」 (『宮地裕・敦子先生古稀記念論集 日本語の研究』明治書院)
- 吉田茂晃 (1995) 「〔形容詞+ム型〕述語の諸相」 (『島根大学法文学部文学科紀要』23)
- 仁田義雄 (1997) 『日本語文法研究序説』(くろしお出版)
- 蜂矢真郷 (1998) 『国語重複語の語構成論的研究』(塙書房)
- 近藤泰弘 (2000) 『日本語記述文法の理論』(ひつじ書房)
- 定延利之 (2000) 『認知言語論』(大修館書店)
- 尾上圭介 (2001) 『文法と意味 I』(くろしお出版)
- 高山善行 (2001) 「モダリティ形式の連体用法——『枕草子』を資料として——」 (『国語語彙史の研究』20, 和泉書院)
- (2002) 『日本語モダリティの史的研究』(ひつじ書房)
- 山口明穂・秋本守英編 (2001) 『日本語文法大辞典』(明治書院)
- 井島正博 (2002) 「中古語過去助動詞の機能」 (『国語と国文学』79-1)

付記 本稿は, 2003 年度国語学会春季大会シンポジウムでの口頭発表を基盤としている。なお, 本稿は平成 16 年度科学研究費 (萌芽研究) 「平安時代語の名詞句についての基礎的研究」(研究代表者・高山善行) による研究成果の一部である。

——福井大学助教授——

(2004 年 12 月 3 日 第 1 稿受理)

(2005 年 5 月 6 日 最終稿受理)

On the Adnominal Usage of Auxiliary *mu*

TAKAYAMA Yoshiyuki

Keywords: *mu*, modality, noun phrase

A number of previous studies have made an analysis of the adnominal usage of the Old Japanese auxiliary *mu* based on inductive methods; however, the essential problems have been left unsolved. This paper investigates and describes the adnominal usage of *mu* based on a deductive method. Specifically, this paper compares and describes the following two different types of noun phrases (NP):

Type A: Inflected word + *phi* + *hito* (e.g., *wakaki hito*)

Type B: Inflected word + *mu* + *hito* (e.g., *wakakara-mu hito*)

An investigation of the syntactic features of these two types of NP in Japanese classics shows that Type B can be described as a noun phrase for non-reality; only Type B NP had restrictions in terms of types of predicates (i.e., they do not co-occur with existential predicates or predicates marked with tense/aspect forms), and co-occurrence with expressions of time, place and quantity (with some exceptions which can be explained). The paper concludes that auxiliary *mu* in Old Japanese functioned as a marker indicating non-reality of the noun phrase.